

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K05702

研究課題名（和文）白川郷五箇山における屋根を下ろした合掌造り家屋と念仏道場に着眼した文化資源の継承

研究課題名（英文）Inheritance of cultural resources focusing on the unroofed gassho-Style house and Nembutsu-dojo in Gokayama and Shirakawa-go

研究代表者

黒田 乃生（Kuroda, Nobu）

筑波大学・芸術系・教授

研究者番号：40375457

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の結果から、白川村には13棟の元合掌造りの家屋があることが明らかになった。五箇山は楮集落だけで8棟あり、より多くの元合掌家屋が残存していると考えられる。これらの建物の多くが1960年代から70年代にかけて屋根を下ろしており経済的な理由から軸部を撤去できなかったことがわかった。外観からの特定が困難で当初の予定とおりに五箇山全体の家屋を把握することができなかったのが今後の課題である。また、念仏道場について、白川村は17世紀から18世紀中頃にかけて次々に寺号を得たため現在道場はない。五箇山の上平地区、平地区には少なくとも19ヶ所の建物が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

世界遺産登録によって地域内外の格差が生じ、必ずしも地域全体の文化を継承する契機にはなっていないとも言われている。「白川郷・五箇山の合掌造り集落」では合掌家屋のみが注目され保存の対象となっているが、本研究では存在がわかりにくい形態が継承されている屋根を下ろした元合掌造りの建物を特定した。大きな茅葺の合掌造りの屋根がなくなっても、継承されてきた建物があり、潜在的な文化資源を把握し顕在化させた点に学術的意義がある。これらの建物や文化を特定したうえで、今後は地域全体の資源としての活用することが求められる。

研究成果の概要（英文）：From the results of this study, it was clarified that 13 former Gassho-style houses remain in Shirakawa Village. There are more remained in Gokayama. Many were roofed down in the 1960s and 1970s and could not be removed 1st floor shaft for economic reasons. There were three types: the appearance of the shaft did not change, it was covered with galvanized iron, and the whole was covered. Regarding the Nembutsu Dojo, Shirakawa Village received temple names one after another from the 17th century to the middle of the 18th century, and there are currently seven temples. At least 19 buildings were confirmed in the Kamitaira and Taira districts of Gokayama. Only the world heritage Gassho-style houses are attracting attention and are the target of preservation, but it is required to identify the buildings and cultures that are invisible and utilize them as resources for the entire region.

研究分野：造園学

キーワード：民家 世界遺産 浄土真宗

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 白川郷と五箇山の現状

「白川郷・五箇山の合掌造り集落」は1995年に世界遺産に登録された。「合掌造り」と呼ばれる大きな茅葺き屋根の建物が特徴で、岐阜県北部から富山湾に流れる庄川沿いに点在する三つの集落が構成資産である。近年の市町村合併により、近世までは42の集落のまとまりだった「白川郷」のうち旧荘川村は高山市に編入され、「五箇山」は旧平村、上平村、利賀村の70集落の総称だったが現在は南砺市の一部となった。世界遺産に登録されたのはこれら112集落のうち、わずか3集落である。2005年から2015年までの10年間で五箇山では24%、白川村では19%人口が減少した。さらに、世界遺産登録によって地域内外の格差が生じ、必ずしも地域全体の文化を継承する契機にはなっていないとも言われている(黒田,2007)。「世界遺産登録されなかった集落にこそ白川郷と五箇山の本来の姿が継承されているのではないか?」これが、本研究の問いかけである。大きな茅葺の合掌造りの屋根がなくなっても、家屋と宗教施設が厚い信仰やさまざまな行事とともに継承され人々の日常生活が営まれている集落は多いと考えられる。

### (2) 屋根を下ろした合掌造り家屋

合掌造り家屋は叉首構造、切妻の茅葺屋根の民家と定義され、明治期から現在に至るまで多くの研究の蓄積がある。住民の共同作業でつくる屋根の部分(小屋組)と大工が建設する軸組が構造的に別れているのが特徴である。屋根は養蚕の空間を確保するために合理的な構造が近世に発達したと言われていたが成立については不明な点も多い。軸組は能登や氷見の大工が建築したものもあり、技術の伝播を示す貴重な資料となっている(佐伯,2009, 宮澤,1995)。合掌造り家屋の数が激減した1970年代の高度成長期には民家園やレストランとして他所へ移築されたもののほかに、屋根の小屋組のみを壊してトタン葺に変えた事例がある。これを白川郷や五箇山では「合掌(屋根)をおろす」という言い方をする。その後保存運動がはじまり屋根が維持された合掌造り家屋は文化財として保護の対象となり、1995年には3集落が世界遺産に登録された。しかし、軸部を残して屋根をトタンなどに替えた家屋については、多数存在すると想定されるものの残存状況は不明である。これらの家屋は合掌造りの小屋組を乗せて茅を葺けば復原可能であり、地域の潜在的な資源であるといえるが、現存する数や利用状況はまったく把握されていない。

### (3) 浄土真宗と念仏道場

白川郷と五箇山は浄土真宗の信仰という大きな共通点がある。中でも念仏道場は浄土真宗寺院の初期の形態を表すもので全国でもこの地域にのみ残されている(瀧澤・黒田,2016)。五箇山地域の念仏道場は1970年代に多くが建て替えられ寺号を取得して寺院になった。寺や道場における仏教行事や神社の祭りは農業や養蚕と深い関わりがあり、信仰と同時にひとびとの暮らしに欠かせない娯楽でもあった。これらについて、白川村を含む地域全体の残存状況や集落における配置を明らかにした研究はない。

## 2. 研究の目的

本研究は屋根を下ろした元合掌造り家屋(以下「元合掌造り家屋」と念仏道場の変化を明らかにすることを目的とする。本研究の特徴は潜在的な文化資源を把握し顕在化させる点にある。白川郷・五箇山の合掌造り集落には数多くの先行研究がある。しかし、いずれも世界遺産登録された3集落のみを対象にしているか、地域全体が対象でも「元合掌造り家屋」や念仏道場などの全容は明らかではない(青木,2015)。今後の地域活性化に役立つこれらを文化資源として位置づけたい。

## 3. 研究の方法

本研究は白川郷(白川村)と五箇山(旧上平村、旧平村)を対象とする。まず、資料から合掌造り家屋が激減する前と現在の集落の変化を把握する。次に現地調査によって「元合掌造り家屋」と念仏道場をはじめとする建物の現状を明らかにする。補足として現在の生業や仏教行事および「元合掌造り家屋」について変化の要因を明らかにする。

## 4. 研究成果

### (1) 「元合掌造り家屋」の把握の試みと課題

白川村における合掌造り家屋の数の変化を資料と現地調査から把握した。集落ごとの数をみると荻町は大きな変化がなく、その他の集落では減少が大きかった。中でも大郷地区は比較的規模の大きな集落が多いため変化が大きい。昭和26(1951)年に41棟あった飯島は民宿を営む1棟のみに、鳩谷は18棟あったものが現在1棟になった。島と荻町の枝村である戸ヶ野は昭和48(1973)年にあわせて20棟だったが現在3棟になった。山家と呼ばれる北部では昭和36(1961)年に合計19棟あったものが48(1973)年までの10年余りの間に2棟になり、現在はまったく

なくなりました。

残存する屋根を下ろした合掌造り家屋について、研究当初は外観から判断することができるかと想定していたが、実際にはさまざまなパターンがあることがわかり、聞き取り調査を実施して白川村全体の屋根をおろした合掌造り家屋の現状を把握した。白川村全体で13棟の「元合掌造り家屋」を確認できた。大郷地区（荻町から飯島まで）に最も多く、9棟あることがわかった。南部（御母衣から木谷）は木谷の1棟のみだった。

調査の結果、合掌造りの屋根をおろした家屋の外観には3種類あることが明らかになった。まず、合掌造りの屋根を下ろして2階を増築したもので、1階部分には変化がない。次に外観をトタンや新建材の壁で覆っているもの、さらに1例のみ、合掌材をそのまま残してすべて覆った家屋もあった。いずれも聞き取り調査からもと合掌造りだったとされたもので、特に3番目の事例については外観からは不明である。なお、荻町の一棟は伝統的建造物に指定されている。

聞き取り調査によると、屋根をおろした時期は木谷では昭和37（1962）年、有家ヶ原は昭和38（1963）年、椿原では昭和10年代などばらつきがあった。当時は経済的な余裕がなく全てを建て替えることができなかったという理由が多く聞かれた。高度成長期以降は軸部もすべて新しくなっており、早い時期に建て替えた家屋が屋根を下ろすのみで、そのまま残っていることがわかった。

また、家屋は特定が困難だったが、元合掌造りの付属小屋は小屋組を支える構造から特定することができた（写真1、2）。



写真1 外壁を覆った元合掌の板倉



写真2 軸部が残る元合掌のハサ小屋

五箇山においても白川村同様、外観から特定することが困難だったため、残存が確認できた楮集落において聞き取り調査および外観調査を実施した。これによると、楮では18棟中8棟が該当した。また、白川村に比べて数が多いことが明らかになった。また、赤尾にも1棟確認できた。楮の1棟は合掌造り家屋が建設されたのも比較的新しく、「ハイカラづくり」と呼ばれる2階建のものだった。上平地区のM家について、詳細な聞き取りを行った。合掌造りの屋根をおろしたのは昭和26年である、屋根を下ろす前にマヤ（馬屋）は床を張った。ガイドコロの下には井戸があった。北側の田の字型の間取りは創建同時のままで、ウシノキが見える（写真）。2階は子どものUターンの際に新しくした。



写真3 M家の梁（ウシノキ）



写真4 間取りの改変がない

## (2) 念仏道場と寺院の変遷

白川村における念仏道場に関する調査を行なった。『飛州志』（延享2年）には現在の白川村の

エリアに 15 世紀終わりから 17 世紀にかけて成立した道場が 10 箇所、寺が 2 箇所あったことが記されている。これらの道場は 17 世紀から 18 世紀に次々に寺号を取得し寺になった。ダム建設で 2 寺離村で 2 寺が移転または廃寺となり、2021 年に椿原の齋入寺が撤去された。現在は平瀬、稗田、荻町 2、鳩谷、飯島、小白川の 7 箇所である。五箇山には多くの道場が残っているが白川村には現在道場はなくなったことが明らかになった。白川郷の各集落における戸数から、合掌造り家屋の個数の推定を行った。延享 3 年（1746）時点で 230 戸、明治 40 年（1907）では白川村全体の戸数は 320 まで増加し最大であり、おそらく 300 棟近くあったと考えられる。念仏道場については、17 世紀から現在までの白川村における各集落の人口、戸数、寺院の変遷を比較した。中切（9 集落うち 1 集落枝村）、五ヶ村（5 集落）、大郷（6 集落うち 1 集落枝村）、山家（6 集落）に分けて集計した。戸数は大郷と中切の増加が見られ、北部の山家とダムに多くが沈んだ五ヶ村には大きな変化はなかった。人口はいずれも 1960 年をピークに減少した。一戸あたりの家族数は大家族があった中切地区のみ 1900 年までが 20 名と突出しており、そのほかは 1850 年代に 7 名から 10 名だったものが、現在は最も多い大郷で 3 名、保木脇のみが残った五ヶ村は 0.9 名と減少した。このような社会状況と道場（寺院）の現状を比較すると、現在住職がいる寺院 7 ヶ所のうち 4 ヶ所が大郷に集中している。また、開基当初から寺院であったと伝わる長瀬 稗田、荻町（本覚寺）、鳩谷、椿原については昨年廃寺になった椿原を除くと現在も続いている。白川村の念仏道場が五箇山に比べて道場というかたちで残っていないのは、17 世紀から 18 世紀中頃にかけて次々に寺号を得たため、なぜこの時期に集中したのかに関して今後の調査が必要である。

五箇山の念仏道場と寺院の変遷は、村史等の文献資料から把握し白川郷の状況と比較した。平村史によると、近世には五箇山には 36 ヶ所の念仏道場と寺が 2 ヶ所あった。昭和 17 年には 42 ヶ所に増加し、昭和 50 年代には 30 ヶ所（3 ヶ所の内道場を含む）、令和 3 年には少なくとも 19 ヶ所（3 ヶ所の内道場を含む）に変化した。地区別に寺院と道場を合わせた数を昭和 17 年と比較すると、上平地区には変化がなく、平地区で約 82%、利賀地区では約 67%となっている。平村史に記載された念仏道場がある集落の人口は明治期と現在を比較すると人口は約 18%、世帯数は約 47%に減少した。人口の減少率に比べて念仏道場と寺院の減少が緩やかであることがわかる。栃原は道場跡地が市指定史跡に、上中田と寿川は建物が県指定文化財となったが、上中田ではもとの道場が別の場所に移築されてしまったため、集落の家のお内仏で報恩講を続けたという。

一方、白川郷は近世には道場 7 ヶ所、寺院 4 ヶ所あったが、現在念仏道場はなく、住職がいる寺院は 4 ヶ所（36%）に減少した。白川村の明治期と現在の人口を比較すると約 60%となっている（ただし明治期は戸籍人口）。五箇山にくらべて減少率は少ないにもかかわらず、寺院や道場が減少していることが明らかになった。

### (3) 考察

本研究の結果から、白川村には 13 棟の元合掌造りの家屋があることが明らかになった。五箇山は楮集落だけで 8 棟あり、より多くの元合掌家屋が残存していると考えられる。これらの建物の多くが 1960 年代から 70 年代にかけて屋根を下ろしており経済的な理由から軸部を撤去できなかったことがわかった。外観からの特定が困難で当初の予定とおりに五箇山全体の家屋を把握することができなかったのが今後の課題である。

また、念仏道場について、白川村は 17 世紀から 18 世紀中頃にかけて次々に寺号を得たため現在道場はない。五箇山の上平地区、平地区には少なくとも 19 ヶ所の建物が確認された。世界遺産の合掌家屋のみが注目され保存の対象となっているが、見えないところにある建物や文化を特定し地域全体の資源としての活用が求められる。

#### < 引用文献 >

- 黒田乃生（2007）世界遺産白川郷視線の先にあるもの、筑波大学出版会
- 佐伯安一（2009）『合掌造り民家成立史考』桂書房、
- 宮澤智士（1995）『合掌造りを推理する』白川村・白川村教育委員会
- 瀧澤侑加、黒田乃生（2016）五箇山の念仏道場と仏教行事の変化に関する研究、ランドスケープ研究 79（5）、449-452
- 青木隆浩（2015）庄川流域における大規模開発と観光化による地域変化：研究史と開発史との関わりを中心に、国立歴史民俗博物館研究報 193 11-48

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Nobu Kuroda	4. 巻 2019(2)
2. 論文標題 Conservation Design for Traditional Agricultural Villages: A Case Study of Shirakawa-go and Gokayama in Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 BUILT HERITAGE	6. 最初と最後の頁 7-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------